



量地指南後篇卷之三

勢南

處士村井昌弘編述

極傳解

夜中見町

夜中見町とは夜陰小町見と量る此法なり。一書に夜陰の目的とあるも、まことに夜の見様と云ふも、

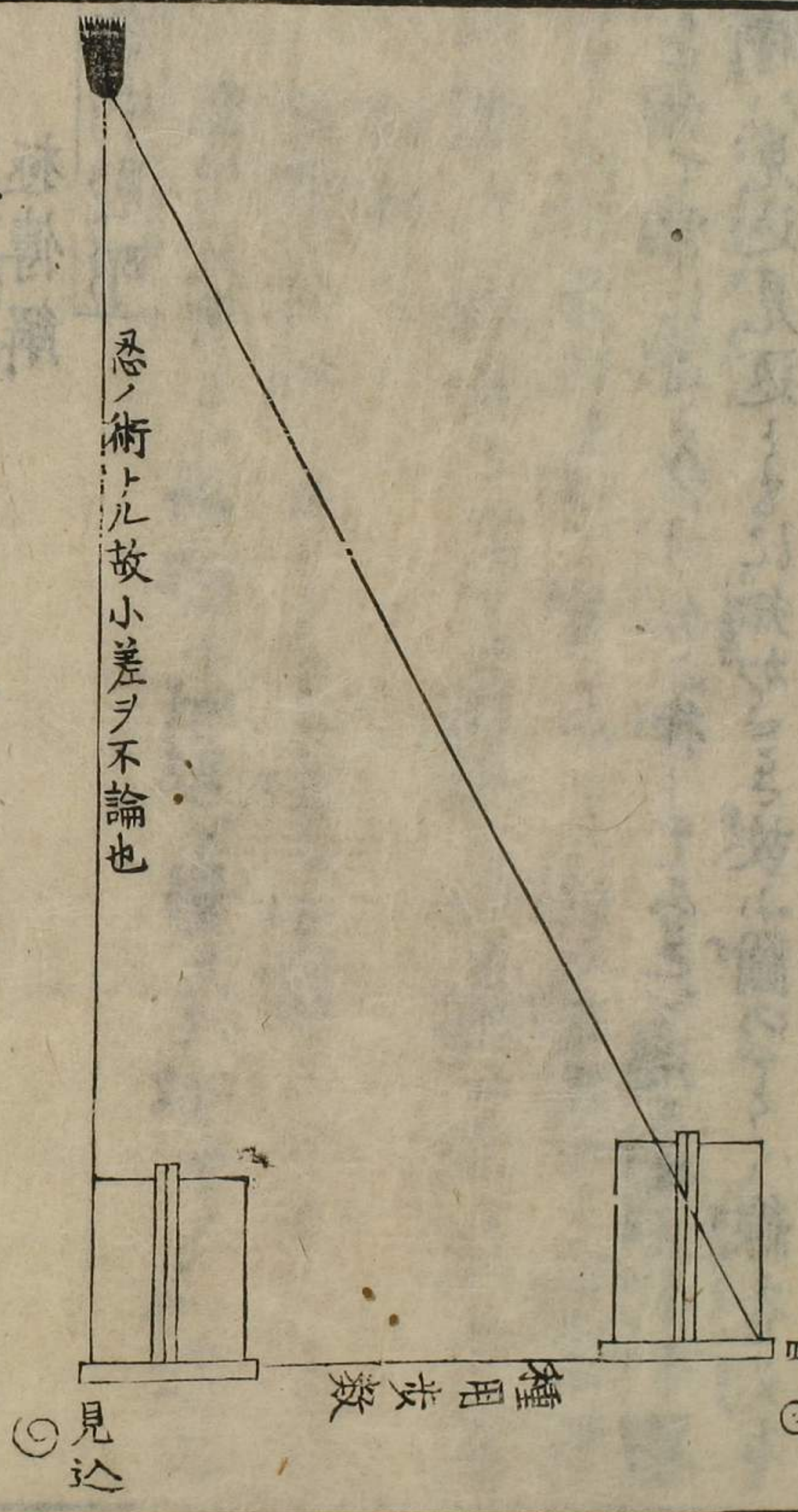
同術なり

古傳云闇夜といふも、目的小火を用る時ハ白昼小異ならず。但渾発を以て量るが故、故小定規やりの器小割を併て常に遠く線寸分小摸して、まを、用る也。且手本闇時ハ見込見返とも、知か、故小圖の、線香又、火繩等、少く短く切て火を付け、是を目的小を、らひて

量地指南後篇卷之三

一

見込を。去るはこれハ昼小同くと云云



悉く術トル故小差ヲ不論也

又云右小火を用る時ハ見盤めても求め知る術あり。然る時ハ渾発を以て計るても自由なり。或ハ十間開て一の割

に當ると見ハ遠さ十町なぐ。兼て試と知るなり。余ハ是と推て積るを

船路之積

古傳ハ曰海上を涉て曲節直徑の船路を量知の術なり。是ハ船路の要といふも同術なり

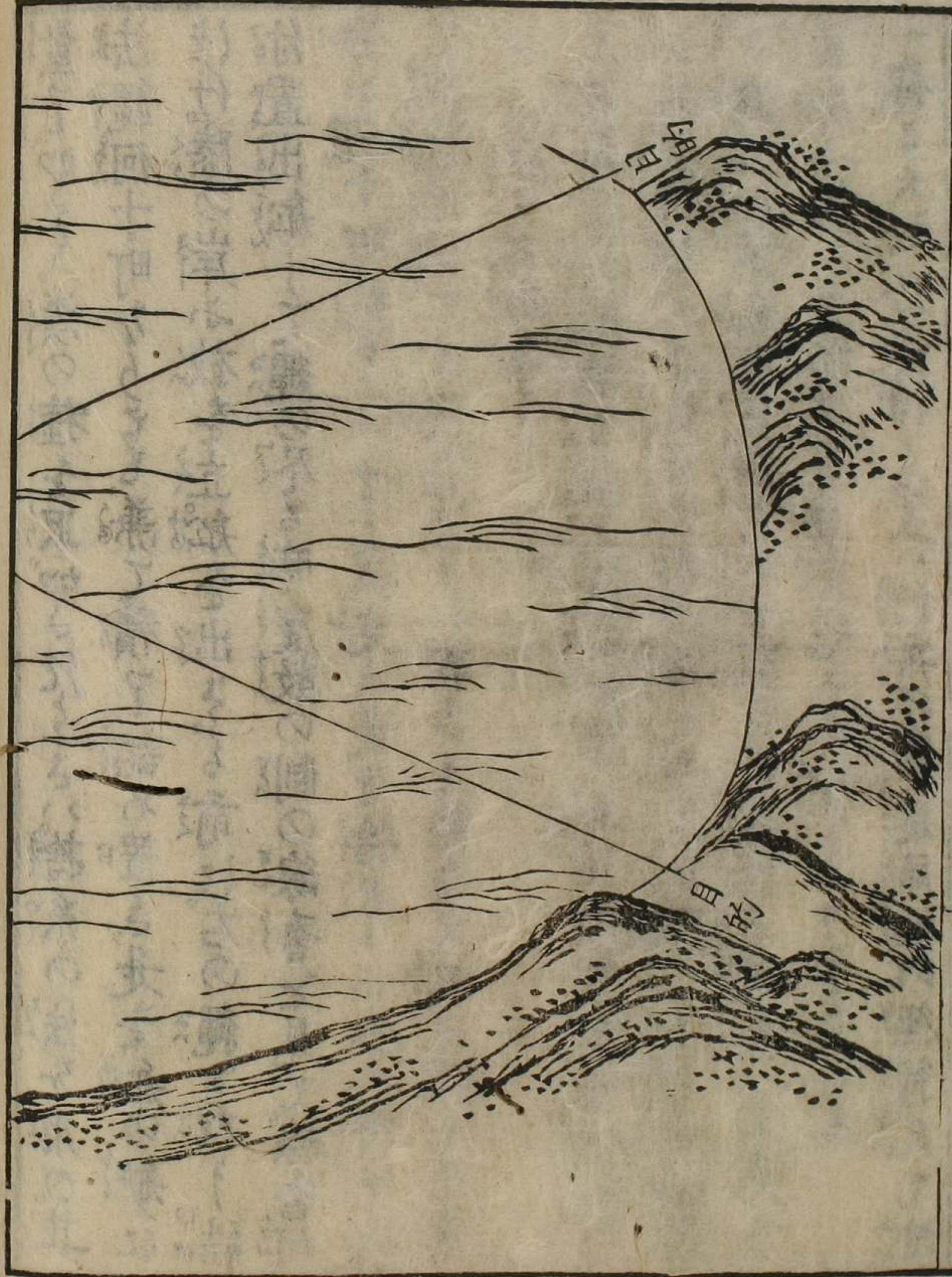
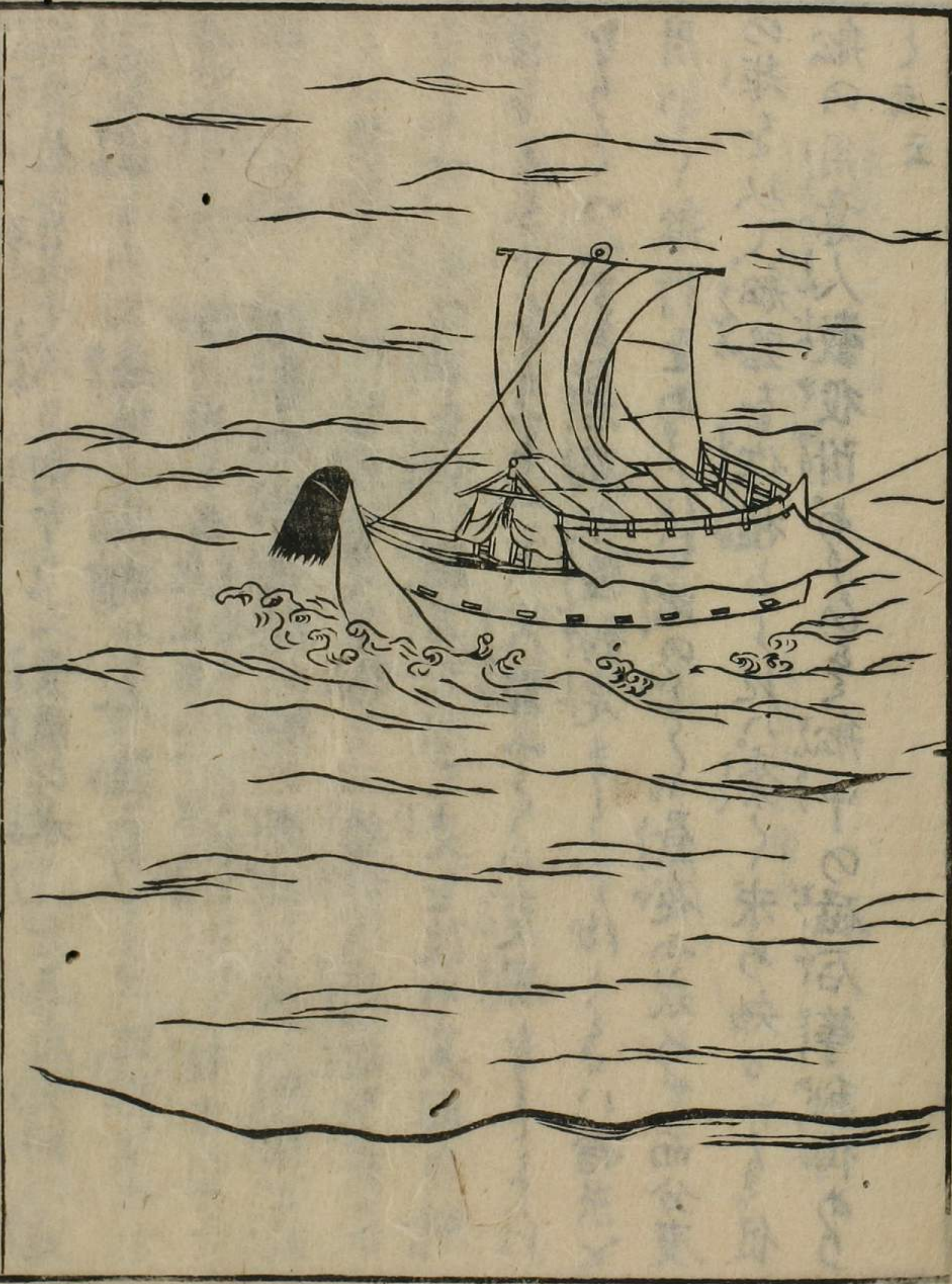
術曰先陸地小於て湊口の兩端の廣幅を求め。是を海上の種と爲。扱船中ハ度数を仕掛置磁針を以て。方位を極り然して出船す。度数とハ線香土圭記歌傳聲捨糸等。何あても里数を試るは品物をつかり。勿論洋中あて変風あるともハ捨糸なり。何れも其船の走の様を悉く改むる。昼夜右の如く。怠屈すぐら。曲徑路一次この方位の町里を糾すと。嚴重なるべし。然る速路の船路曲道

直路掌杖指うぶくなくんと云云

或傳曰湊より船出づる以前近邊の山へ上り。湊をぬれ町見を勤め。何十町と知り。其種の口を違ひして。扱長と二三尺許の竹を渾癸のごく拵へ湊の口は合せ。要と能く置。湊より船を漕出すれば。舳立右の竹を以て。湊の口とする。竹の開口湊の口は合の時。軍前陸を町見を求る所の道程と均く舟走ると知るべし。是を湊の種といふ。度数の制。度数といふ何れをも以て。船の走りて知るべし。圖の制。数と試するものをいふ。と以て。船の走りて知るべし。竹筒を拵へ寸分を盛付け。内は線香と立置。右に湊の種をもつて量つる。何十町か何分燃とて。是とえらして。一分か何町走ると。一寸か何里走ると定置。線香の寸分を以て。海上の道程を知る。是を刻といふ。又湊を町見

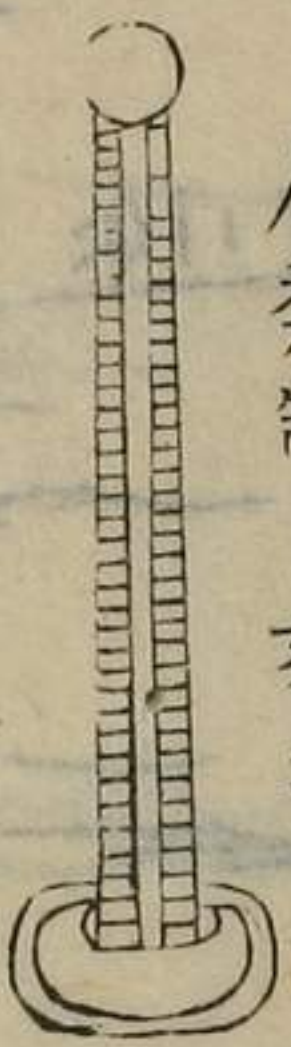
量つるか。湊の種を取がたるといふ。捨糸の法を用ひ。其法。繩何十町なりとも。兼て積り。認め置。是を船の舳に拵。陸の岸に小杖を立。船を出さるる前に。右の繩と杖を結。付置。出船して。繩の尽る時。度数の制の線香を見て。線香何分。何十町走るといふ。或定る。是を捨糸といふ。又洋中にて。順風逆風を以て。變あるといふ。捨糸も線香も始の試とは違ひ。能く心得を

又或傳云。量船路有益之地。名曰湊。岩石押滄波而必有干。兩端其兩端之求幅。而是用出船之種也。得順風而洋中趨。船少無止。如陸地也。蓋曲折而求知之。乃船路之術也。云是又前条も同じく。語なり。漢文のごとく。記するゆゑのこゝ也。一傳云。船路の積といふ。行舟の常道。屈曲の徑程。凡て地



幅方位を具小考る術なり。又長流の水上を尋ね大河の遠
 近を求るふ大益あり。其術ハまづ陸にあり。地幅と求り
 是を繫出の種に用る也。但五里も十里も沖より。叔方角を
 得て出船。線香時計漏刻の類の度数を以て刻限と亂
 一。一里毎の航行を定め。是を種々。始終の行道を求る
 方なり。或ハ船の曲る則ハ磁石を以て支を改め。其間の刻
 限を求るすなり。とて大難や。ハ変風なると。捨糸と
 なり。とて。若風の強弱定まらざれば。捨糸と
 用い。船行をわらむ。此の。昼夜も求めて。而分度
 の矩を以て。船路を作極ると。ハ委く求め知るなり。但
 船の用意人数役附。あつて。船中の磁石等秘傳あり
 と云

度数制火刻法



湊渾発石種也



度数制



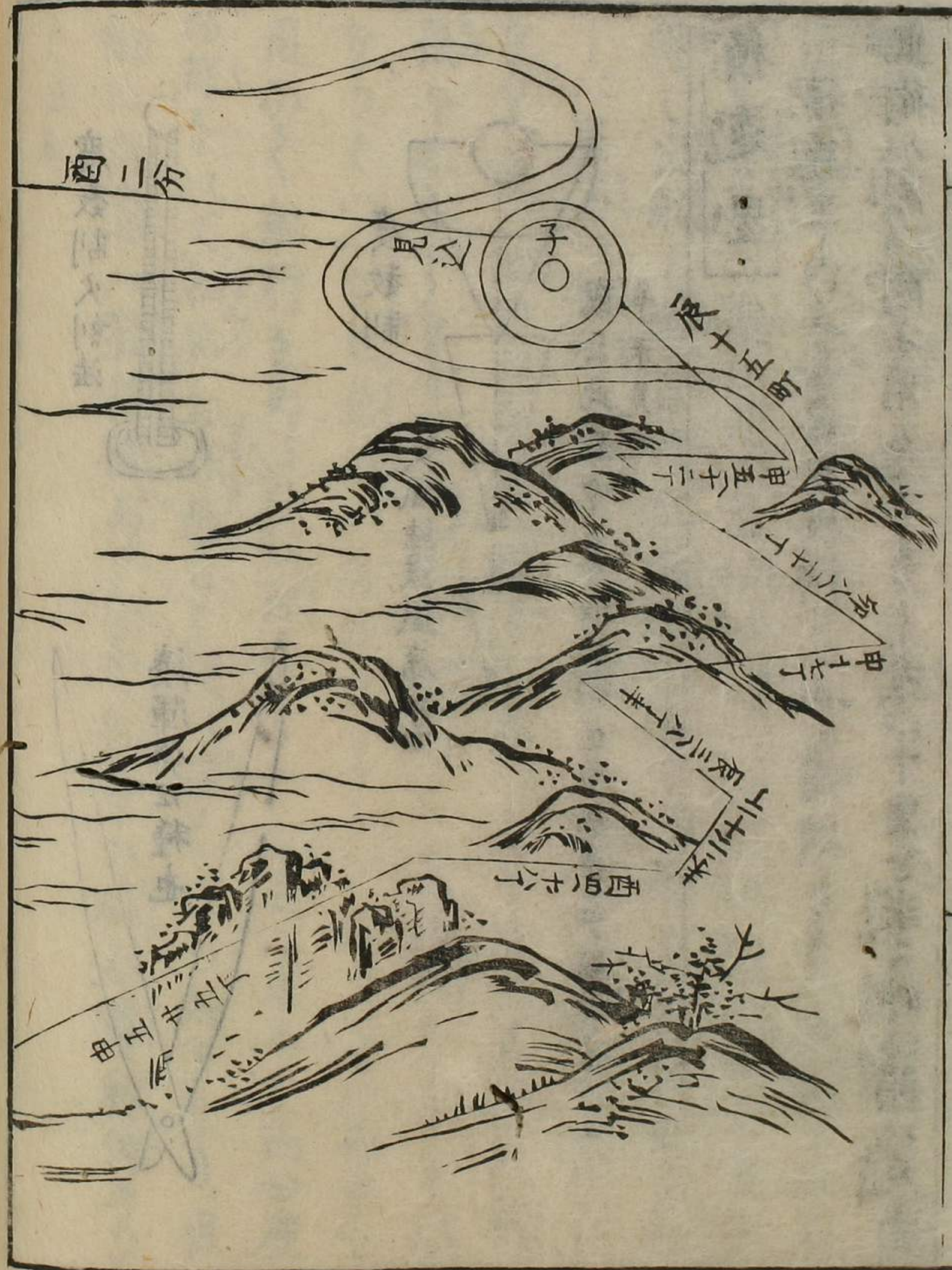
天風法或風席尺云

或云此船中度数旧制也。依無益。今無此器云。予未見之。

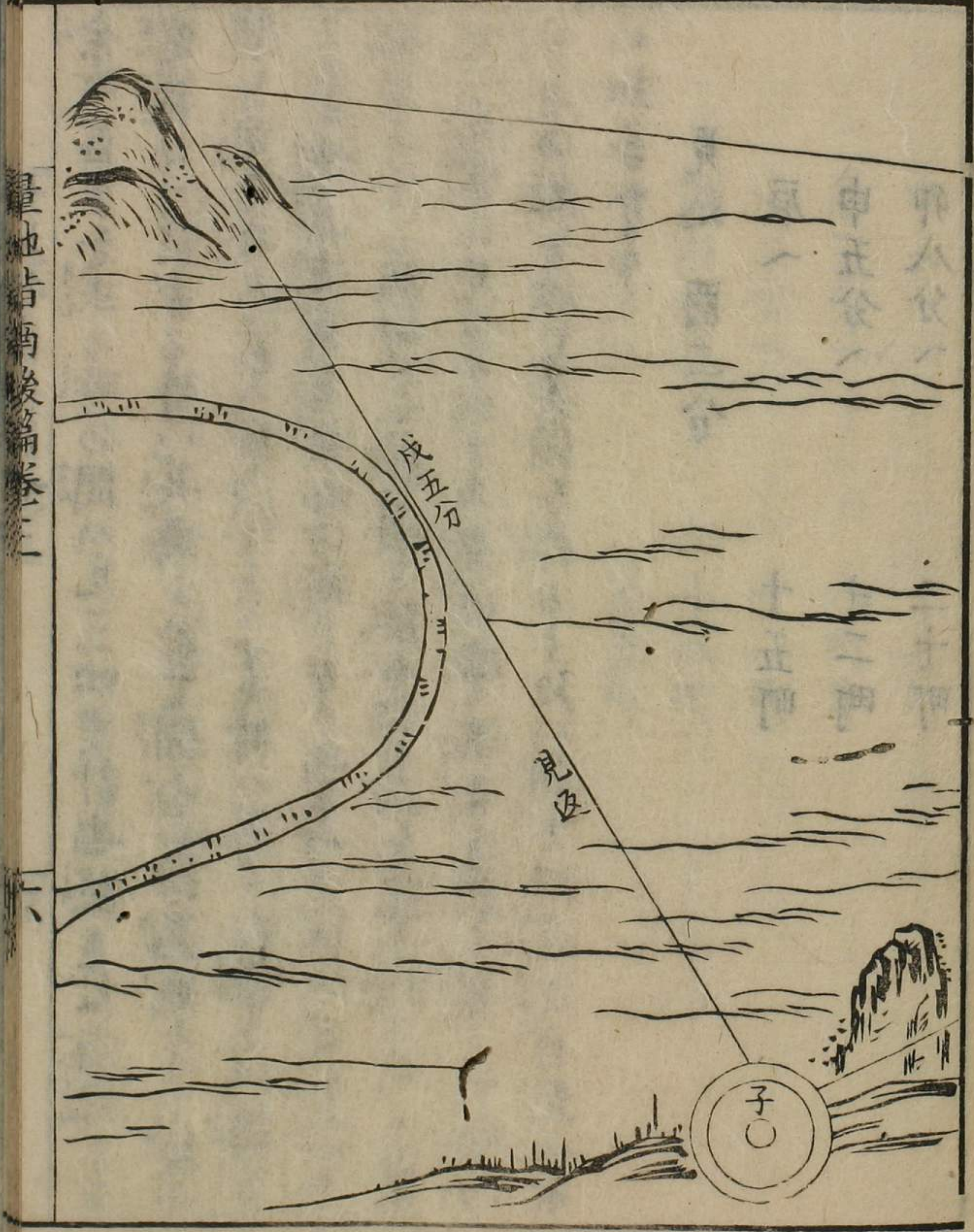
積遠里

積遠里といふも遠里の法といふも同術なり

此術ハ国の圖小用る。多し。或ハ十里を求る時の関ハ九十



圖二



圖一

余町百里を求る時の間ハ九三四里計也然もは海岸より遠寫なり伐求る時ハ其場子於て開る所の畷地なり故に開を重て求るありかればくする時ハ其間に限らば諸方りの遠近方角自未知の術となる也まづ見込の支を記し扱開の支と間町とを幾開も段々に心を記し何の所より限らば見當の見ゆる所より見返して其支を記し然してのら分度の矩を以て其図を作るとれば諸方れ遠近自然未ゆ知るかり

- 見込 酉二分
- 辰へ 十五町
- 申五分へ 十二町
- 卯八分へ 二十町



- 申へ 十七町
- 辰三分へ 八町半
- 未二分へ 十一町
- 酉四分へ 十八町
- 申五分へ 廿五町

見返 戌五分

遠里矩とのふとのり。国図の要法と遠目的の條會慥なるるれば此術を用ひ目的の見込至て遠さるれば線會決らばること間多と者なり此術を以 勤る時ハ數百里といふも未は差るるなり。図の條線の會快るる時ハ針をさし糸を付て元の墨に隨て西方へ引合せ糸の合て會はかるまで何尺も引べし定規を以て隨て墨

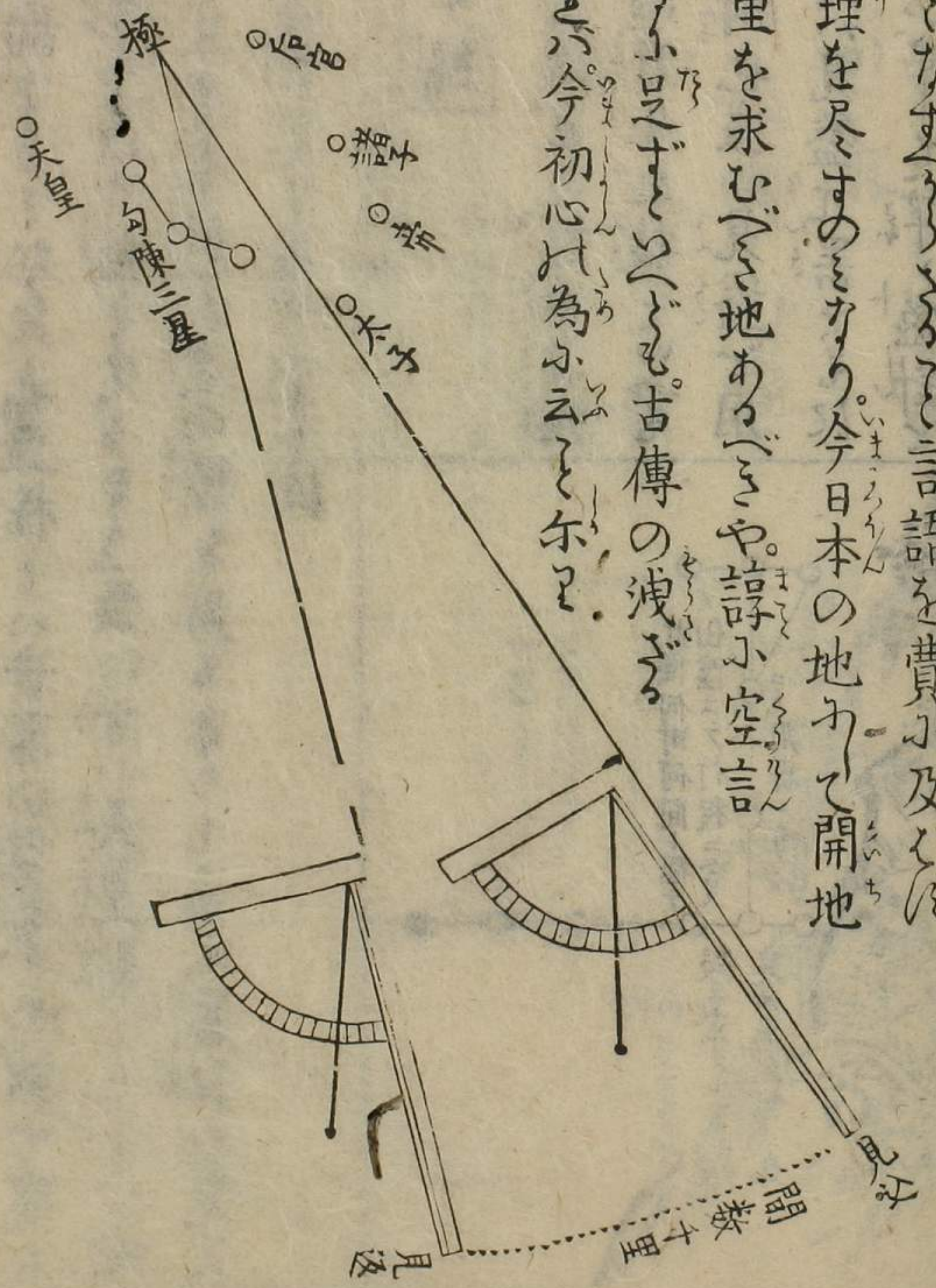
と引てハ。毛髮の差あるなり

試北極

古傳云天の高さを量る術なり。北極の積と云ふも同術也
量天尺を以て北辰を見込て下糸の當る所小記し。數千里と
趨る。又北辰を見込とれば。必下糸の當る所小差出來す。其
差の口を數千里小用ひて。下糸の全長を計るとれば。天の高
さ知るなり。平町を上下に用る理なり。其術明なり。唯
いづも。小里に於てハ求めざるべし。の理なり。謂ハ分数ノ叶
ざる小因てなりしと云

昌弘日町見の教書名此術を載て洩すとは空理なり

定測とかなす。言語を費ふ及ぶ。唯其理を尽すのみなり。今日本の地あて開地
數千里を求む。地あるべしや。諄小空言
論ず。不足と云ふも。古傳の洩ざる
所なり。今初心は為小云と云ふ



舊傳云天の高とハ極の坐まをふとなり。無星の天ハ天文も論ずることなれ也。蓋極ハ世界の貫氣也。故に繞る所ハ星も以て極と定るなり。極の坐ハ天皇星よりして相去る。三度半。但天度の積を用るなりと云云。昌弘云是又無替の言なり用ゆべし

真矩繩

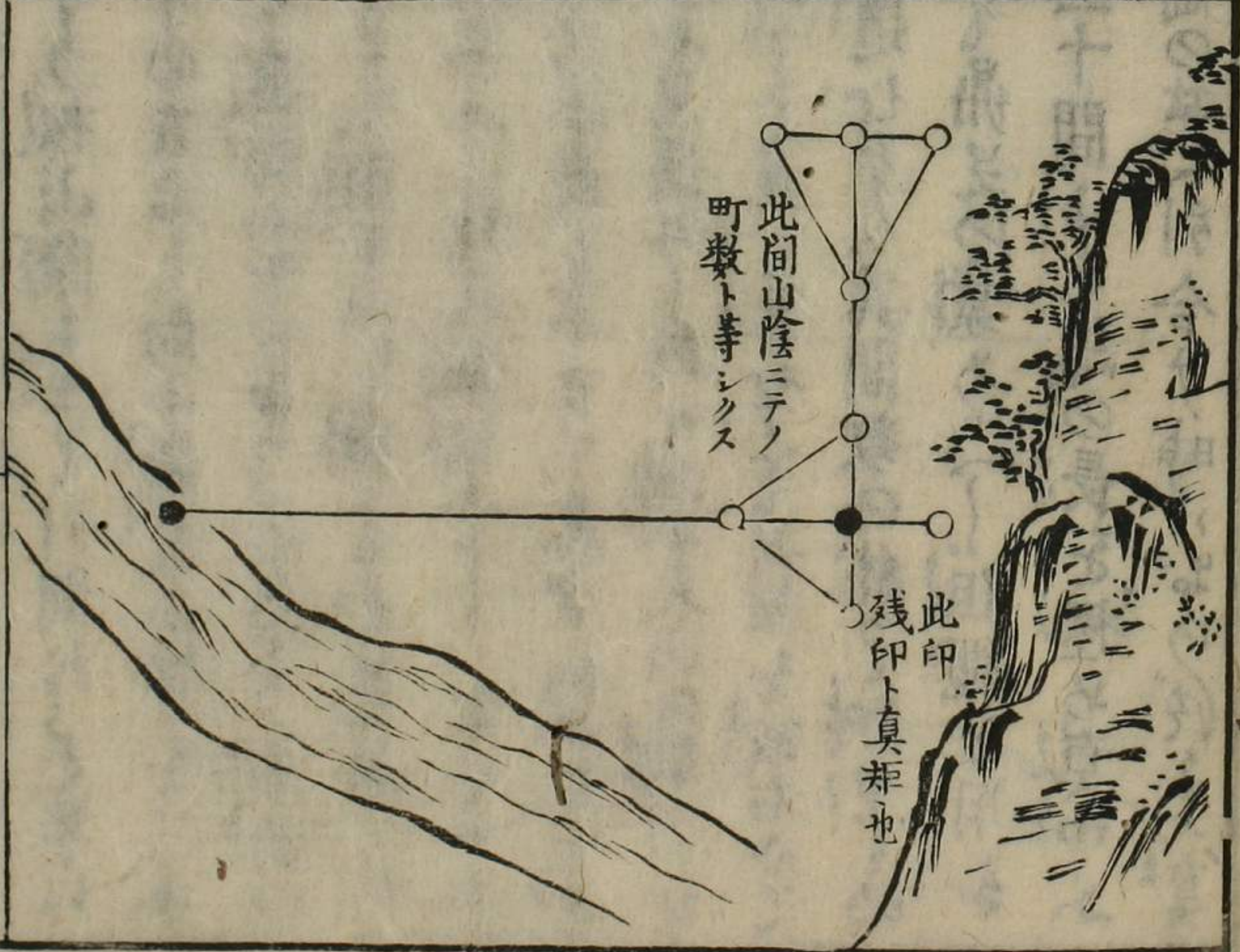
真之繩。真之繩張真矩之繩。真矩之核と云も同術也。或ハ見盤と用ひ又ハ見盤元器ともて用ひずして竿と磁針と



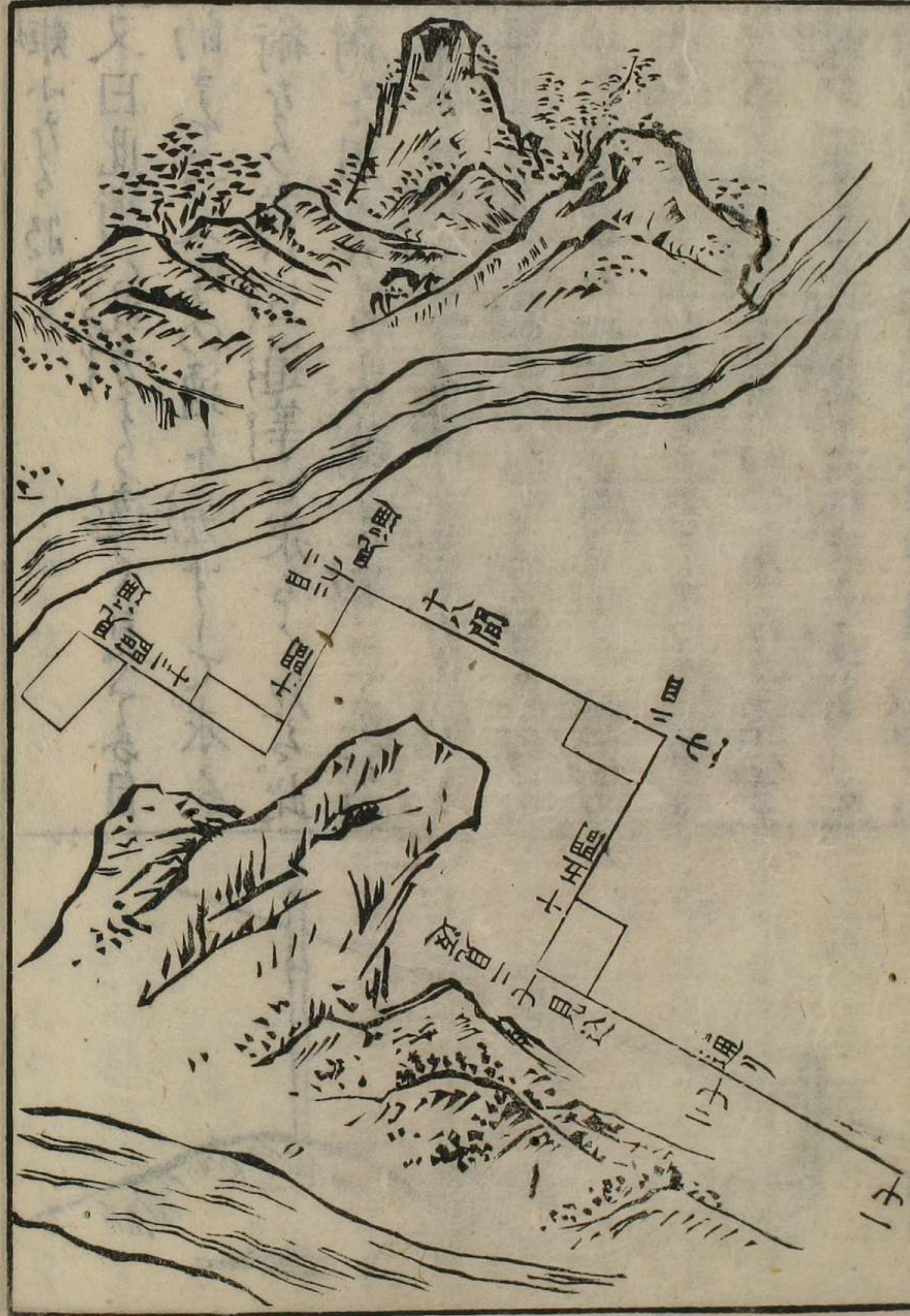
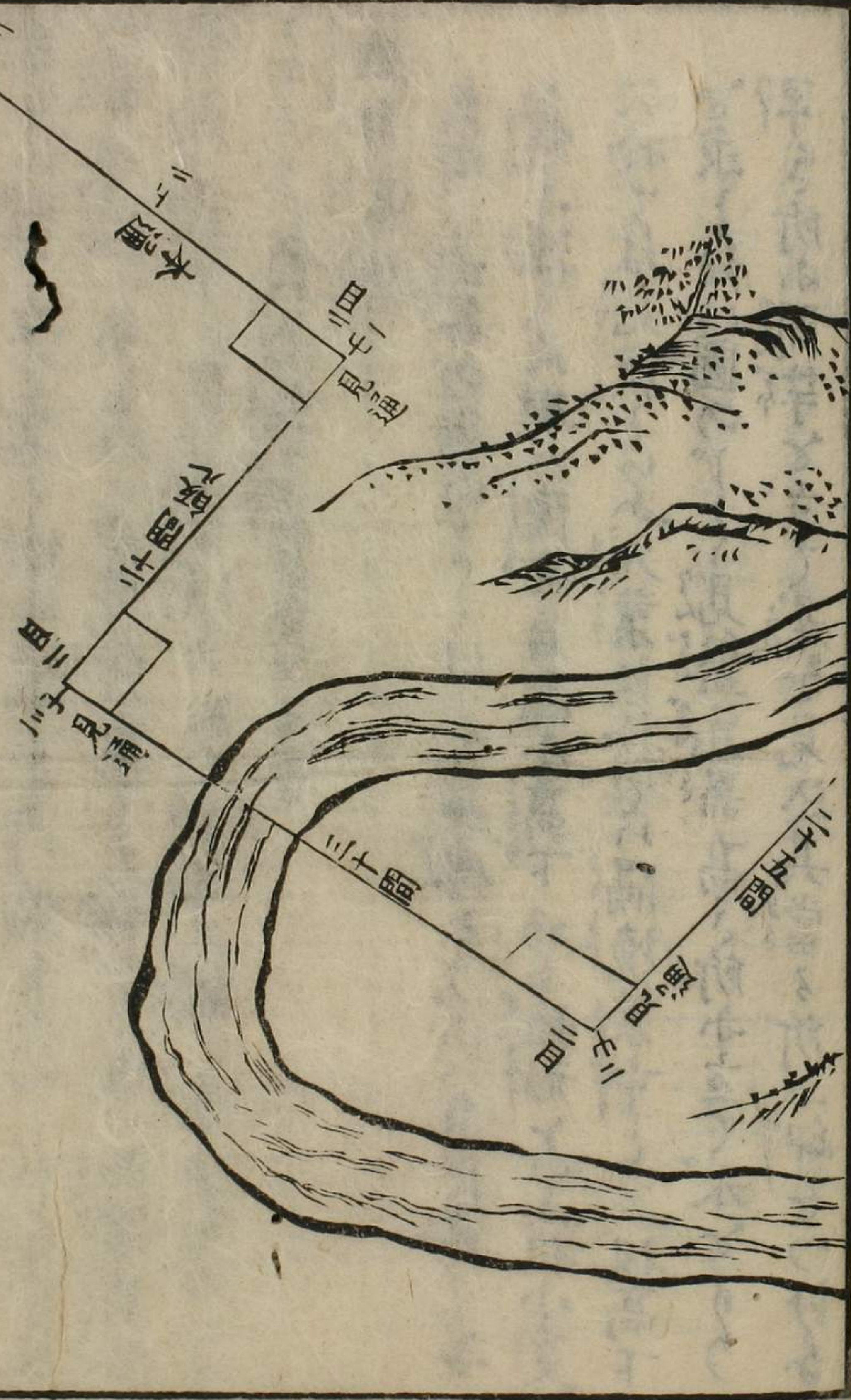
以て量ることも有り。俱小其理ハ同ト

此術ハ屈曲する道路と直小作。或ハ町屋割屋敷割ふ用也。又ハ田地の用水を取小高山と穿ち山陰の水引するところ。かやうの類小第一と云ふなり

術曰望の場所小竿もてを竹もて立。そのより直矩小竿二本を以て段々小



如此規矩元器ヲ用也但各町間ヲ
求ノ渾糞一本ヲ用也口傳

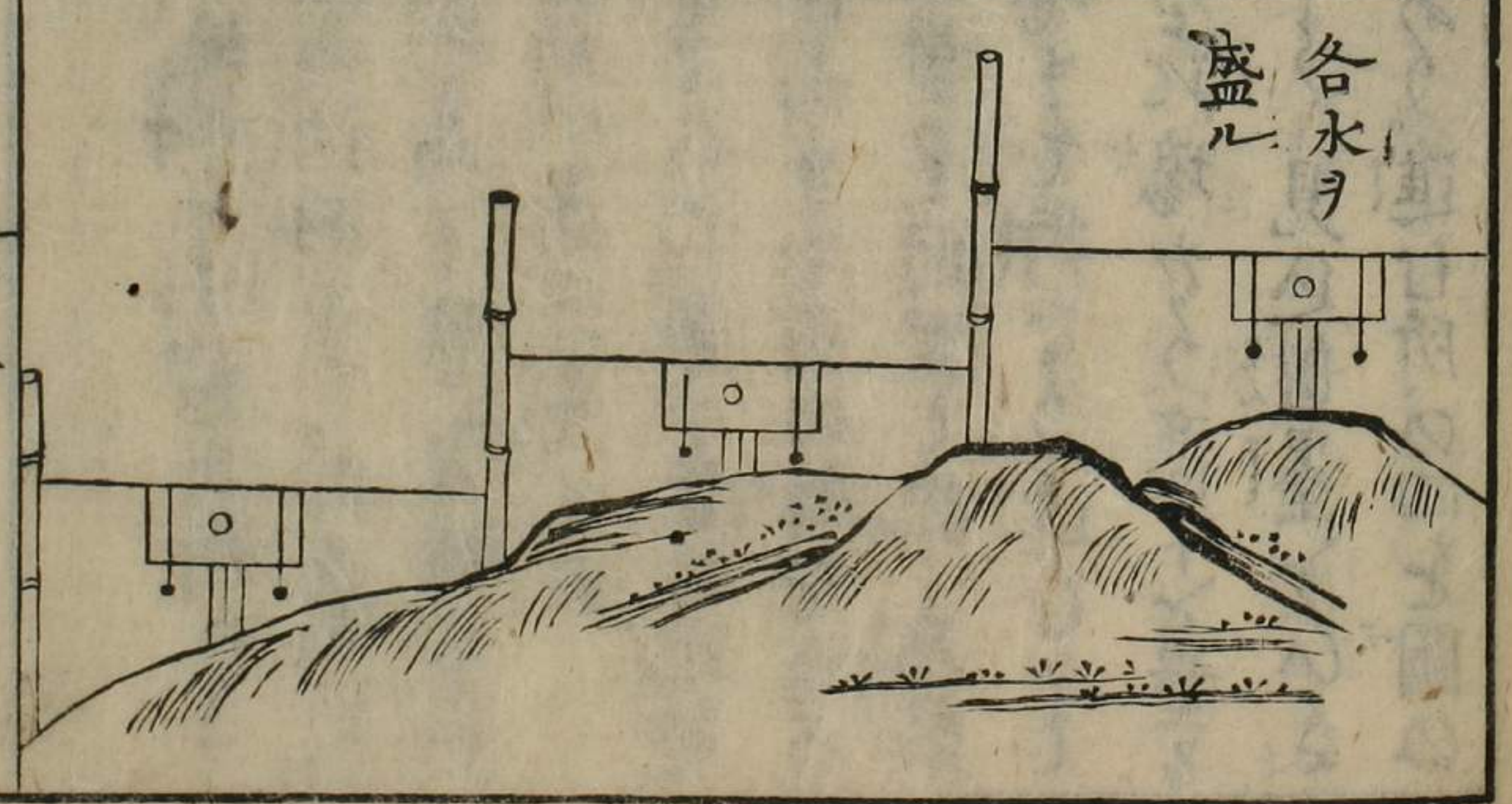


但地幅を知こ、棹の間を定て繩の限、用べし。其繩數少て
遠くは求知り。或ハ川泥等へ行當るは、一本づ段々
越て川向通を寫し、跡の一本をて川幅を求べし。或ハ
の節渾癸一本を以て遠くは求て大益なり。或ハ村里木林
等へ行當るは、ハ二目返を以て直矩小按て本通を求り
しり。或ハ見盤元器等と用也

地形高低

此術ハ山谷の術のごとくにして、異傳あり。山ハ急に高く。谷
ハ斜小深し。此術ハ陸地自然小高下、地形とす。但小変
に於ては見渡とす。大業に於てハ隔境累重とす。扱高下
と求るは、圖のごとく見盤元器高き所小立て。水とり
早き所小間竿と立て。是を見込其當る所小印をつけ

これハ高下の差あるあり。或ハ
段々小送つて差とある時ハ
始終の高下各あつて。或ハ類
書の術目小。地形高下小事見
渡累隔累倍々あるも同術也
傳曰小変見渡とす。ハ用水田畑の
高下。又ハ屋敷等乃高下。輕と業也
然ながら若干の大業も勉べし。其法
盤を豎にして。平直を極め。盤の上端小
定規を置見當りて。高下は量る
所へ棹を立させ。見渡す。或ハ盤尺と
棹小印を付て。其印の上より下りめて



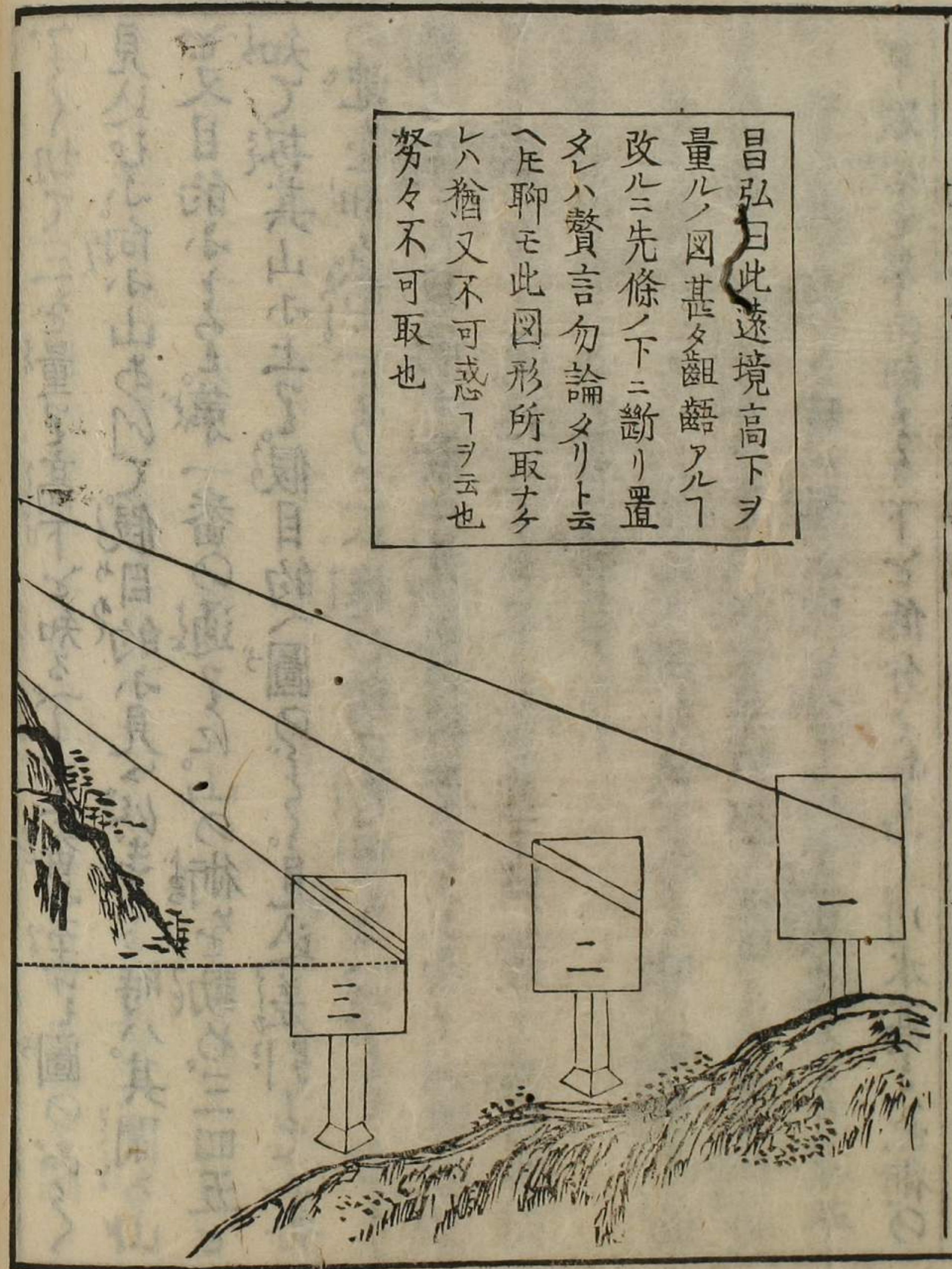
其地の高下と云ふなり

又曰隔境累重と云ふ隣國の高下地形を量知る術なり
尤大業あり故小盤小水と盛る体の仕形ありてあると
ども假令ハ江府より常州総州の高下残る時を築
波山を目的して山の高下を其所の高下と考ふる也
右よ所謂隣國の高下地形を計ると云ふ第一番の場所
めて向上の平町を勉め假目當の山まで五の矩を極め
山の術を勤め三の矩を極め四を量る何里と記し見盤
小悉く盛つけ次の盤を立てた場まで行なり進むこと
何里と町里と打て知る盤を立てた場なり高下と量る
るた地なり二番に至る又圖のごく見込盤墨と云ふ
其地の高下又目的の遠近めて差あり進む所の四を圖の

ごとく切て三を量り高下と知るべし三番小至る圖のおどく
見込む向ふ山ありて假目的小見へば進む時ハ其閑る山
と又目的小と第一番の通る山の術を勤め三四五と
知て扱其山小上り假目的へ圖のごく見込差引して三番
の地を知る尤二より二へ進む所の町里も二のごく右
断る閑る目的小假小見通の材磨を立てる四番小至
るて圖のごく見込三よ云のごく高下は知べし進む處の
町里を知るごとく二番の場のごく

或傳ふ云遠所より川水池水等を此方へくる時ハ先水平器
を以て此方ぬ地安を定め扱水平弦以て五町も十町も印の
川水を見て低き時ハ竿小印と付て川小立置此方より水平
を眺合せ竿の印より下を低分と知るべし川水高きハ此術の

昌弘曰此遠境高下ヲ
量ルノ図甚々齟齬アル
改ニ先條ノ下ニ斷リ置
タハ贅言勿論タリト云
ヘ凡聊モ此図形所取ナ
レハ猶又不可惑ヲ云也
努々不可取也



還源を用い。水平と五六尺も高く臺をて上げ。夫より川水
と見るるを

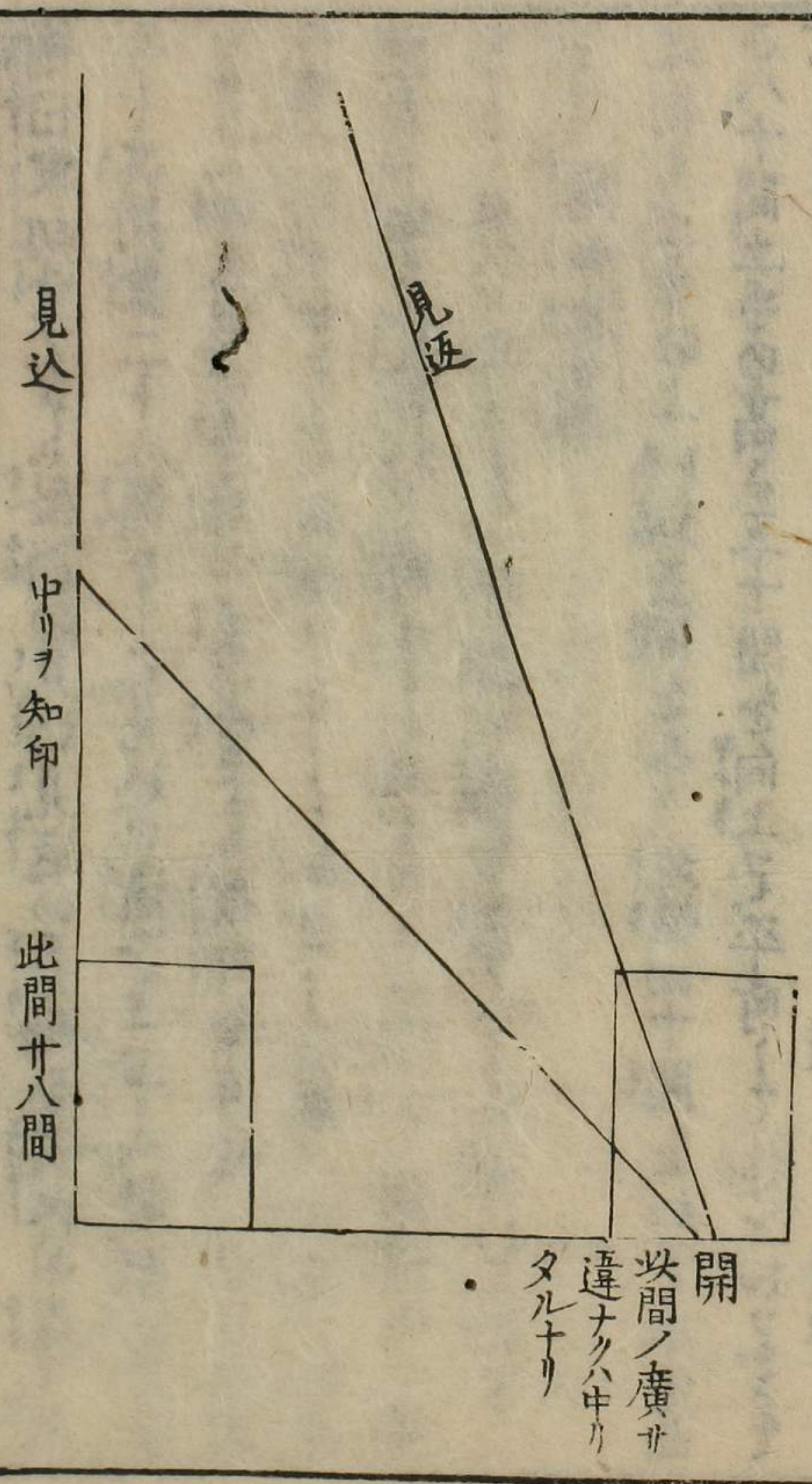
又云彼方此方と同直の地あり。水上と水落と同尺あり。樋の水もさうさうに上より押うけ水ある理なきとも。勾配ぬらたハ洪水のとれ悪し。水の流も程あり。其所の高さか



らびハ用ふ立ず。右十町も先まで。目的見定めぬ。五町目と六町目に印の材を立夫と見通し。又五町目より向と見通し。遺厚之間と打心して。中次の理なり。又十町先まで横へたりとも。斜ふたりとも折曲。又十町も先の勾配を見時ハ曲途として。三角の矩と耽合せ。其後右のどくに見通し。高下と知る。或ハ家作の節礎の高下。水盛水繩を引く。遠近ともに同理なり。

又云谷を廻一向の山へ水を取る勾配常に考置る。又山とほりぬき。山の前の川を山の後の田へ水ゆると知事。川より山の高下積。又田より山の高積。其高下して知るべし。或ハ山の上より。前の川。後の田の高下積も善といふ。
 中不中片極

此術ハ假令ハ。取初平町して量置る。遠程若眼力の誤りなどあると疑ひ。是とたふ。此術を以て改正する。是ハ中否立所ハありし。

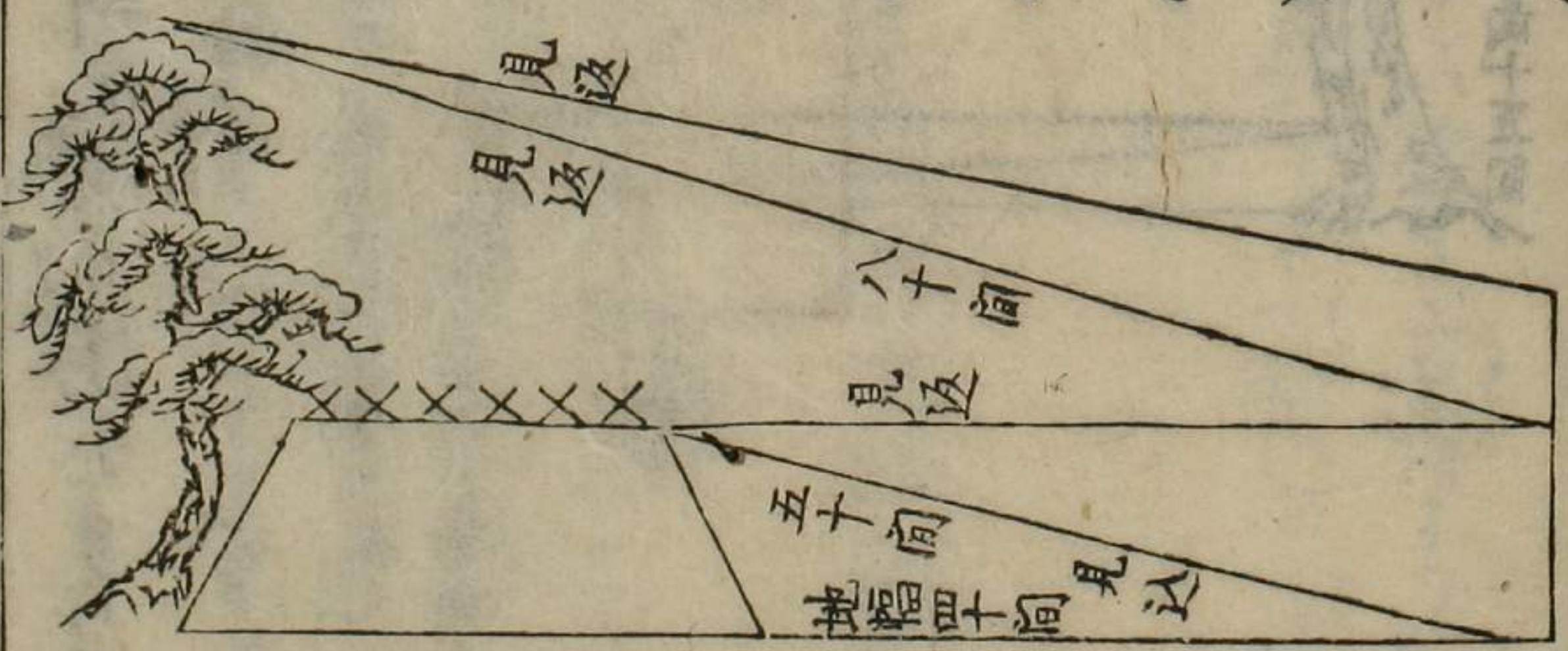
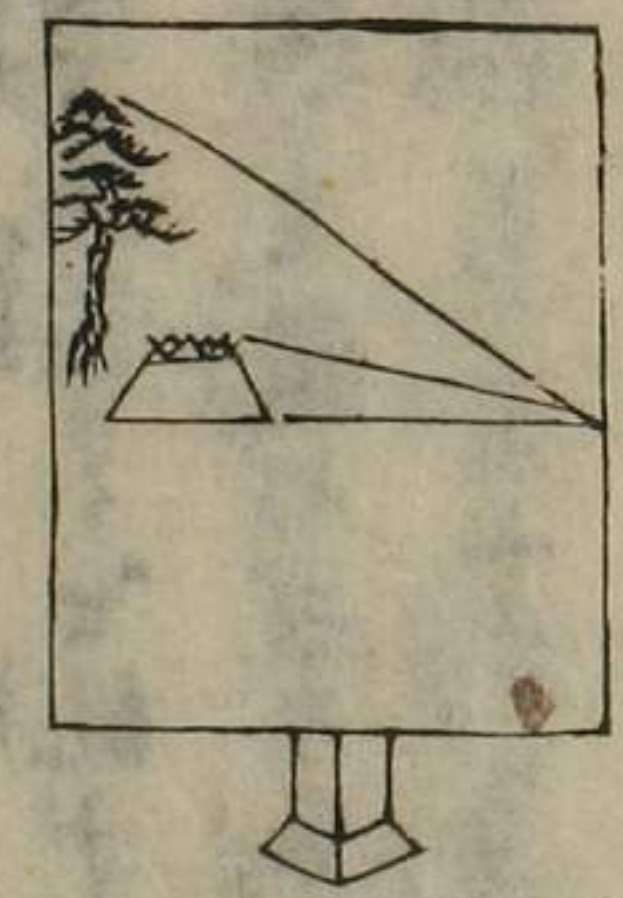


術曰寂初量つゝ。盤面の見込見返の墨線を其俣お置て。假令を其開除二十八間なむ。見込の通つも二十八間。開除の印と付て。扱見返の手前の墨の會より。彼印を見通し。両の開除の緒口同寸分なむ。其誤りなき。知る。此術ハ前編の知雙開方と均さ。更あむ。辨ず。及む。極傳の一條として用ひ。學者の惑を生ぜんことを畏れ。記す

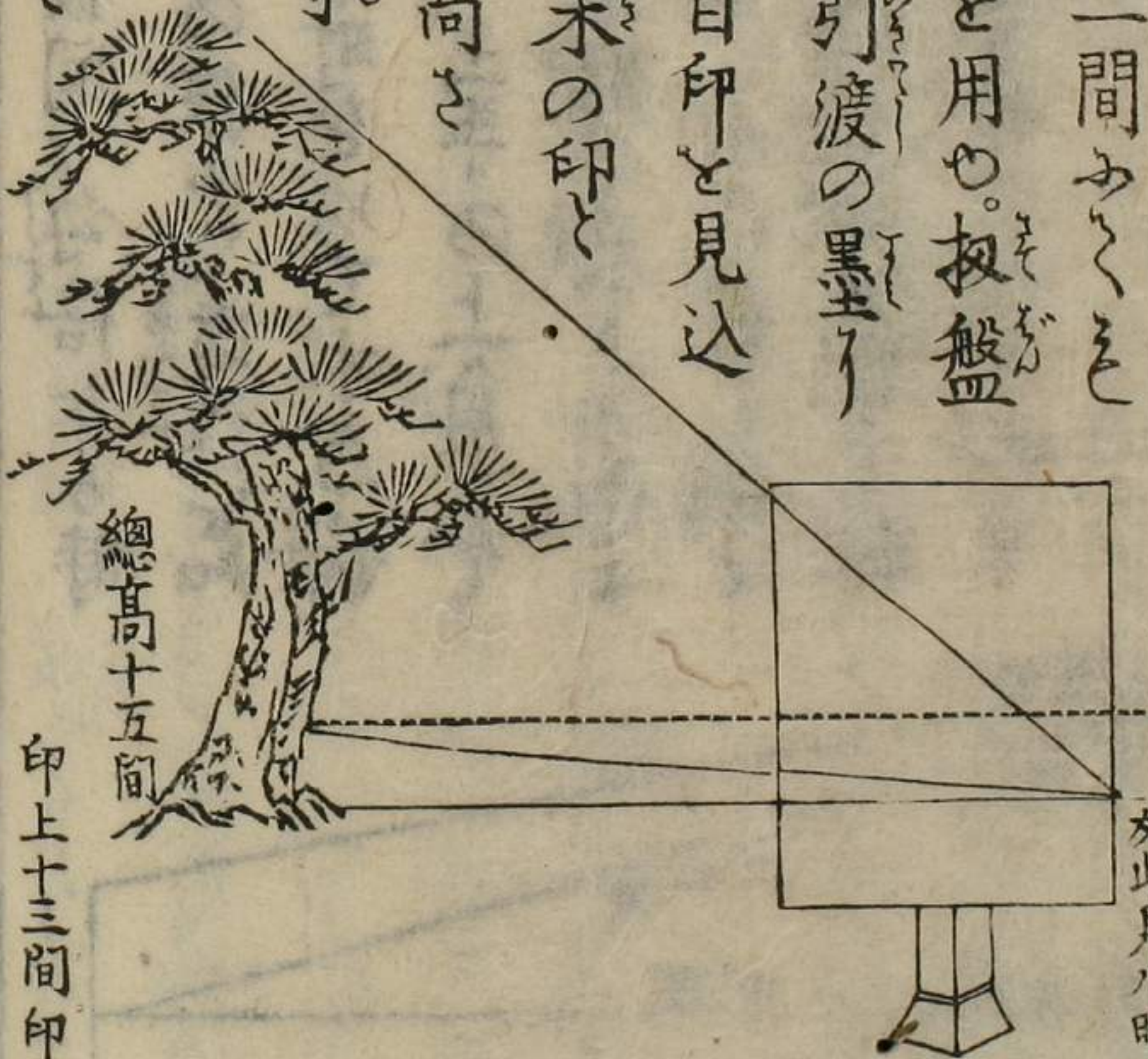
土手陰知木高

此術を土手の上馬踏五間をきり。地幅四十間を知り。木の高さ八十間。土手の高さ五十間を向上。平町を矩と知り。て盤を整めて。木の高さ。土手の高さ。見込。墨を引。各矩を計り。其盤。土手の形をきり。右の分見。木の高さを知る。尤土手の兩垂斜。同。や。ふ。し。時。ハ。知。る。也

又云此術ハ土手の前後同。勾倍なり。時小求。理。先土手の根。遠程を知。扱同所。向上の平町を以て。木乃損。空の規を求め。同く土手の上角。空の規を求て。土手の馬踏の廣さ。知。扱右の所。小盤を豎。小居へ。水浅盛。要。用ひ。見込。各墨線を引。分間。割。盤を用ひて。形を極る也。古傳の俣。記す



指高何分 此術ハ高下の誤りと糺す術也。但見盤をりち也。假令バ木の高と十五間とも豫め求め知し時中の中を糺す。先其盤面の口と十五小割て墨と引渡し。扱其木の根より。一間あつても二間あつても立木小目印と用の扱盤と立て水ととり。盤面の引渡の墨と定木と當木小つけとも目印と見込る。其盤面の墨と立木の印との當するは。即木の高と相違なりと知べ。或ハ天守櫓の重々と糺し。又三分一五分一等はと指す。おまそ



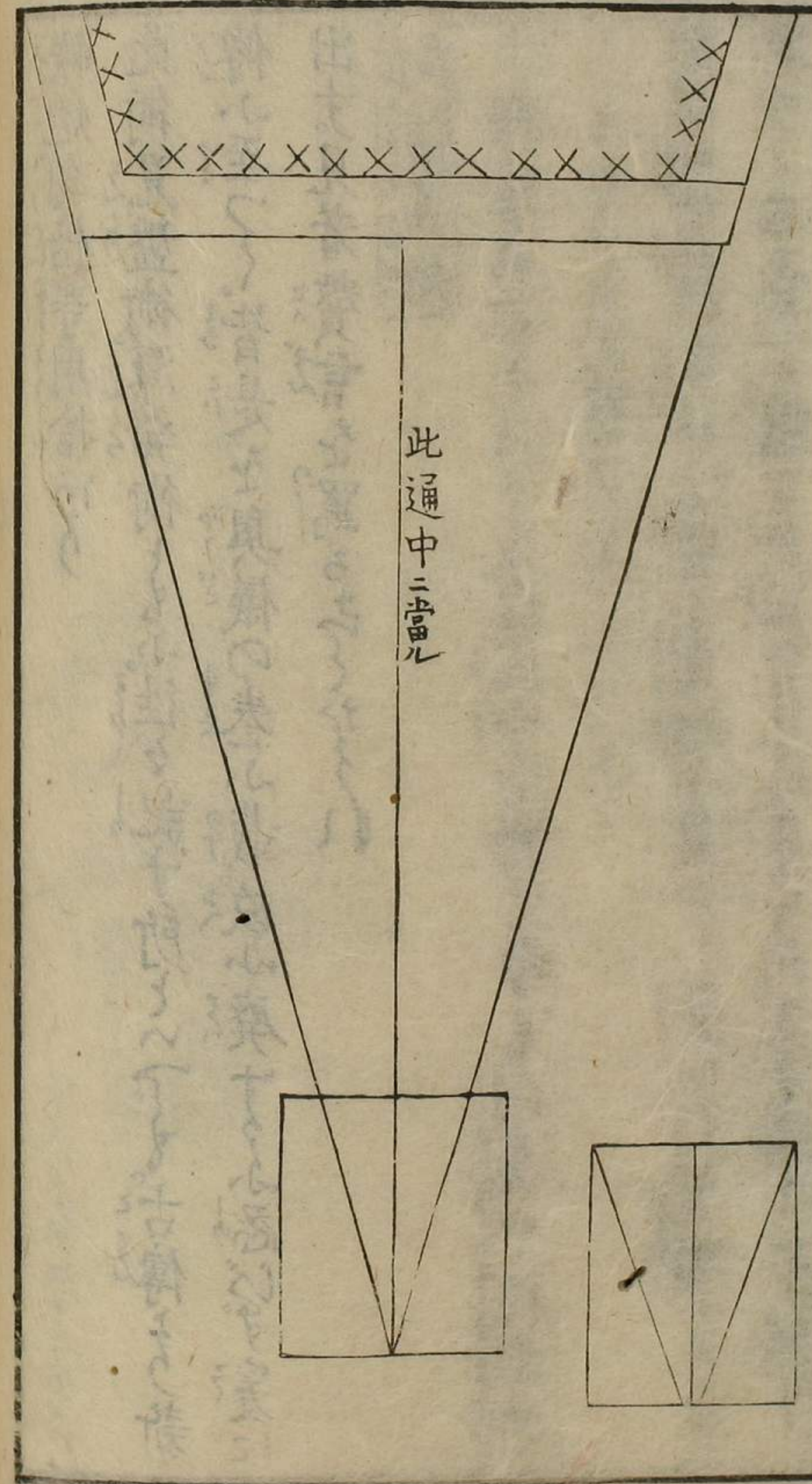
如此見ル法傳ヲ誤ルナリ
如此見ル時ハ相違ナリ

鉄炮勾倍等用捨り
此術見盤術渾癸術とも小。往々記す所といへども。古傳より新傳小至つ。皆是を奥儀の巻小載故小廢す。不忍び。爰に出す。見者贅言を罵る。さくなく。い

向指真矩

向指真矩とけりも。向正中と指とありも。向真中從陰指とありも。同術なりと
術云向の両の真中と望と先初小真中小墨を引。其場小至つて真中と思ふ所。盤を居左を見込墨を引。其尾頭を右へ寫し。是小定木と當て見込當る処。追よりて當るなり。扱各當る。成得て中の墨小當る所向の中なり
又云盤の真中と割て墨を引。大圖向の中程空眼を以てる。な

求む。盤を居定木をとりて或は左の端を見込で墨をひき
其口と右の方へ横み。墨を引。是は定木を當て右の方を見



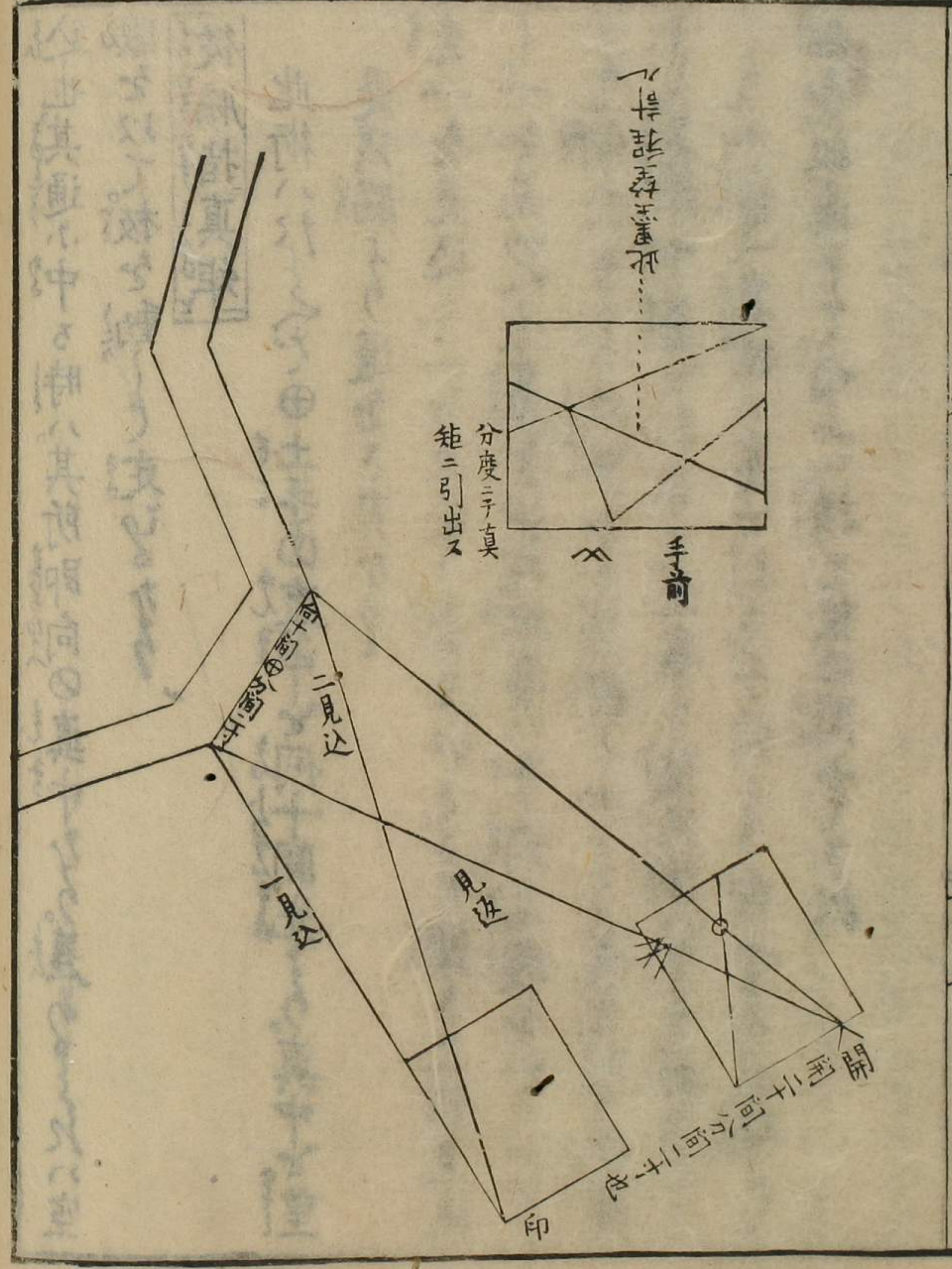
此通中ニ置ル

込也。其通小中る時ハ其所即向の真中なり。差あるとれハ空
眼を以て板を動して定むるなり

從脇指真矩

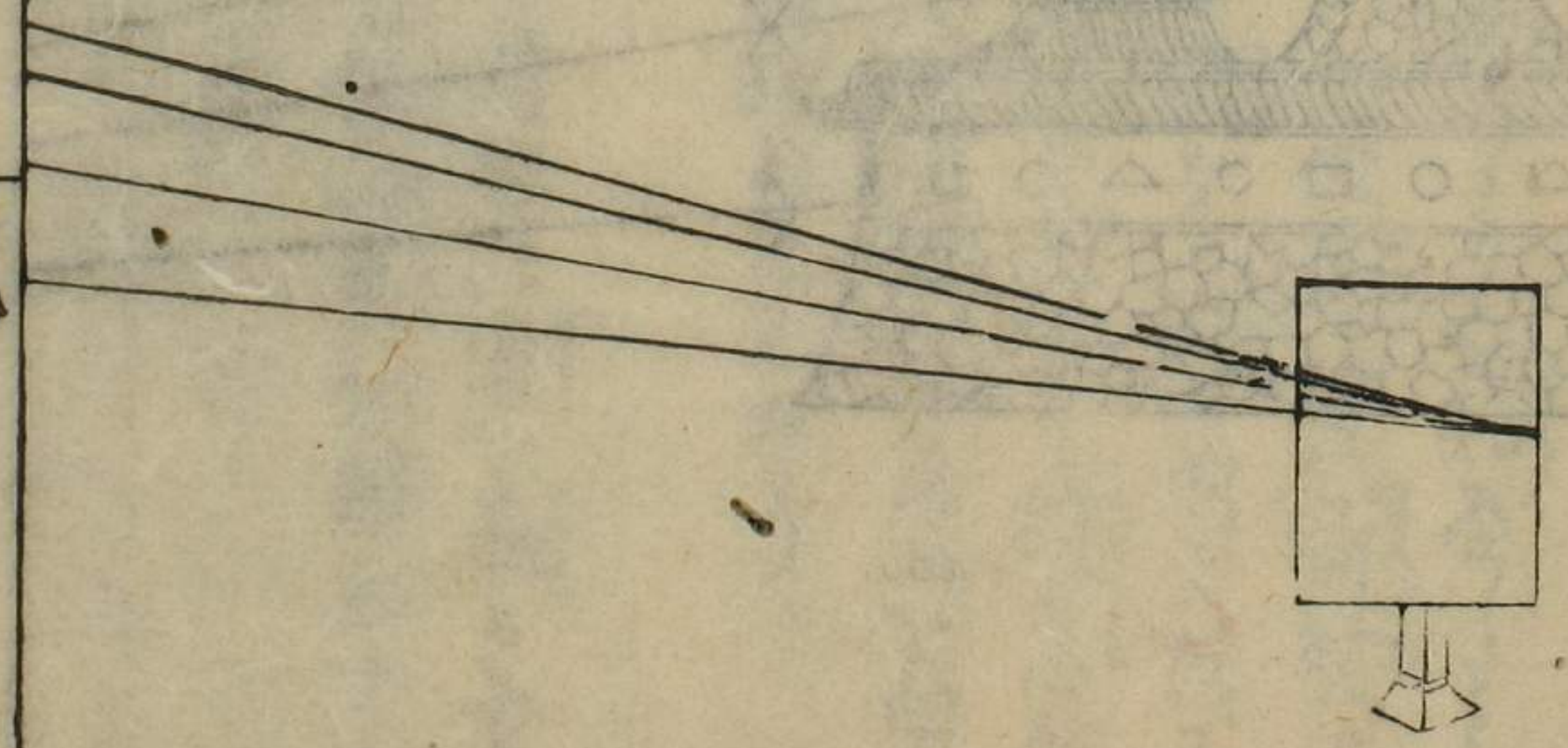
此術ハたゞど田土手の真中と何十間先より真中と望
是は脇より通をさすなり

先一を見込。二を見込。墨をひき。さて開き二は見込
一を見込。墨をひき。地墨ハ手前尾頭をかき。分度
し。向ふ。次身なり。◎絞と分より墨を引。分度
して。真矩中墨と引出し。此墨を望次第けり。板の上
より。手前へ真矩小墨と引。手前より向ふまでの遠さと
知る。板通して向ふ。指て望の間あてし。



天守櫓知居所

一傳小此術ハ同通小重クして
 見ゆる物の其地幅と高下を
 量知の術也云云
 昌弘云此術全体前編より所
 謂山高を知之術と同意也
 とつとも他流秘奥より條目
 に掲るが故小學者の惑ひと
 曉さんぐたりお一圖をなして
 是を示すと下のおと



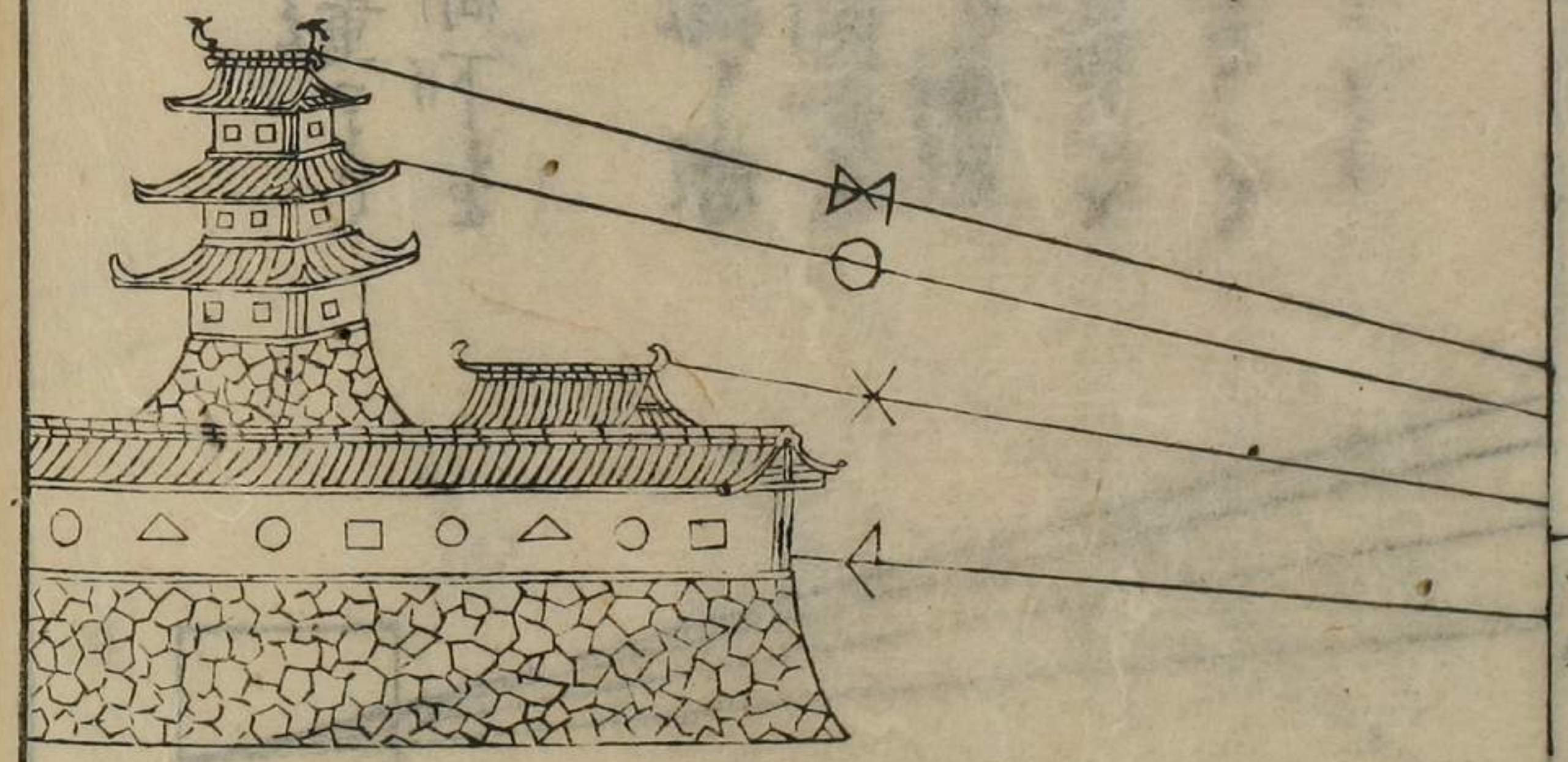
- △ 天守棟上の高
- 上より三重目屋上の高
- × 矢倉棟上の高
- △ 土居上場の高

此圖天守をくらは

五重なるべしなむせ

煩しき故ふはり

て三重とん



山用表裏

古傳云山の表裏と用るといふ山小裏表ありことを知るべき
 解して云。山の表裏八人の座するごとし。人座する時ハ前緩に
 志て後急なり。故ふ急なる方後裏より緩なる方と前と後。又
 東西南北ふらふら。陰陽に配分する理もいろいろも。緩急を
 以て定るゆゑなるべし。其國小居てハ。其国の四方の山と向ふ
 所皆表といふこと宜し。何ふはけても其理あることなり

横山形

山の形を寫すといふハ無益のケ條なり。何時に業と勤るも
 山の術ハ山の形を寫さばといふことあり。但山景を圖画する
 ことハ是ハ輿地術のあづかる所あり

山を畫る

山を責るるらふ六國の圖をさふ。大山を小く画けど空虚なり
て如何なり。又大く圖すれば國郡も蔓りて外面の妨あり
因て大山八分間より小く高く圖するなり。先山の裏と画く
もつひ。又雪を顯すともわり

求山之斜登

山の斜登を求るる目あり。是亦無益の條なり。但し
遠里の高山を量るる各別の法。其外通例山を量るる
斜垂と知るとせざるはなり。其法は條々山谷の術より見ゆ
知山厚

山の厚さしつふ。山の根置地幅のさし。小支見渡直之繩真矩の
抜かぬ術を以て考べ。故小筆舌を費さば

本傳云 ○山岳進退 ○知山高 ○進退知高 ○知谷深 ○

知而山之差 ○知谷幅木丈

極傳云 ○山谷一開 ○知向山前山之差 ○山上谷底知

木高 ○谷深所指間數 ○進退知高

異傳云 ○用山表裏 ○求山登斜 ○換山形 ○知山厚 ○

天守櫓知居所

右山谷の數術を以て。本傳極傳異傳三術小分るもの如何と
察する。都て山谷の術ハ初學會得た。これより。再往教諭
せんが。めなむ。但又本傳より其量法の微意を隠して。極
傳小おわく。始めてこれを曉し。子弟に高きんが為なる。甚
しう。右山谷の術數方あるがごとく。皆予が前
編小述る所の山谷數知方一術の中に明なり。是がたりふ
前編の圖をさふ。是は。是は。参考小をさふ

量地指南後編卷之三

三

量地指南後編卷之三終

